

権力性の繰り延べ原理に基づいた環境哲学

An Environmental Philosophy grounded on the Principle of holding off exercising our Power

丸山 博道

Hiromichi MARUYAMA

目次

- I. はじめに
- II. Holding の原理が要請されねばならない理由
 - 1. Holding という精神性と己の権力性の繰り延べ
 - 2. 真実からの疎外 - 破綻の原理
- III. Holding の原理が価値に及ぼす影響
 - 1. 拮抗する価値に対する勧告
 - 2. 価値体系に起因する紛争の終焉
- IV. この原理が政治に及ぼす影響
 - 1. 多数決原理に替わる新しい社会原理としての holding
 - 2. 新しい政治の機能
- V. Deep Ecology がしばしば社会政治的側面から批判される理由
 - 1. Bioregional deep ecology に対する社会政治学的批判の虚偽と真実
 - 2. Holding の原理が要請する環境哲学の性格
 - 3. 生態学的存在論を基盤とする環境論
 - 4. いかなる価値観も否定しない行動選択の原理
 - 5. Deep Ecology 批判と弁護が取り逃がしているもの
- VI. おわりに

I. はじめに

George Sessions の編集になる論文選集 *Deep Ecology for the 21st Century* (1995) ⁰¹⁾ では、Deep Ecology の Ecofeminism や社会生態学に対する態度はかたくなまでに平行線を保っている ⁰²⁾。Ecofeminism は Gender 問題に固執し、社会生態学は人間中心主義に固執し、生態環境に十分な関心を示していないというのがその理由であった。しかしながら、5年後に編集された Eric Katz, Andrew Light, David Rothenberg 等による Deep Ecology の論文選集 *Beneath the Surface* (2000) ⁰³⁾ では、わずかながら、自発的変容を求めて、批判を受容しようという姿勢に変化してきている。

Beneath the Surface の最終論文 Bron Taylor, *Deep Ecology and Its Social Philosophy: A Critique*⁹⁴⁾ は、社会学的な立場からの Deep Ecology 批判である。この論文の批判的的主として、Bioregional Deep Ecology の米国の草の根運動に見られる二項対立的な把握傾向と、悪質な権力に対する無防備性にあったが、彼の真意は、これらを乗り越えて Deep Ecology を社会政治哲学をも包含する包括哲学に脱皮させることにあった。しかしながら、二項対立的な把握傾向に対する批判は、まことに社会的に正当なものであったが、一方、権力に対する無防備性批判は、これまた社会学の潜在的誤謬とも言うべき権力宿命論に陥っていたことはまことに残念であった。もっとも彼自身の関心は、国際機関における地球憲章といったきわめて穏健な防衛の権力行使にあったのであるが。

ところで、これらの二側面はともに、生態学的存在論の立場から見れば、Deep Ecology の体系化が、Naess の立場でもあるはずの生態学的存在論に正しく則っていないこと - これは、Naess の Ecosophy の第一原理「大自己実現を！」に問題があると思われるが - から生じてくるものであるのに、*Beneath the Surface* の Taylor 論文を含む多くの Deep Ecology 批判は、依然としてその本質を取り逃がしており、Deep Ecology を真の包括哲学に誘うような性格のものにはなり得ていなかった。Taylor の目指すところは、きわめて重要であると思われるが、木に竹を接ぐことは許されないのである。

この小論では、同紀要 45 号 (2004) で紹介した⁹⁵⁾ 唯一例外的とも言える Ariel Salleh の提案、すなわち Ecofeminism への参加招請に従って、その哲学の核心であり、生態学的存在論の原理からの直接的要請でもあるはずの holding に基づけば、いかなる環境論が導かれるのかという問題を論じる。Holding は Sara Ruddick の用語であって、以下に説明されるが、それを生態学的存在論の立場から筆者が言い換えたものが、表題にもある「権力性の繰り延べ」ということである。これは、たとえ Taylor 流の穏健な権力行使であろうと、権力宿命論に根ざす限り、論理構造上大きな相違があり、倫理や政治に対する姿勢にも、大きな相違が現れる。

Feminism が理解しているか否かは別にして、Gender 問題の背後には、権力性という普遍の問題が存在している。Feminist は男性の権力性という問題を Gender 問題の中心に据えているが、実は、男社会の何者かになろうとする女性たちは、すでに十分に権力的であって、男社会による女性の抑圧や環境破壊の共犯者になっている。しかしながら、彼ら、特に、Ecofeminist が、holding の重要性として、権力の有する普遍の問題に、気づいたことは、それが生態学的存在論の潜在的原理でもあることによって、Deep Ecology を、本来そうあるべきこと - 生態学的存在論上に再構築すること - の意義を再確認させてくれているのである。

生態学的存在論は、自然ばかりではなく、あらゆる存在に対する存在性の捉え方を与えるものであるから、それに根ざした環境論は、社会政治的哲学をも包含した、包括哲学になりうるものと期待されるのである。

II. Holding の原理が要請されねばならない理由

1. Holding という精神性と己の権力性の繰り延べ

Ecological Ontology を知の戦略⁰⁶⁾ とすれば、次の主張はいたって自然である。

当為を知る前提となるべきものは存在の実態であり、存在の実態を知るために要請される基本姿勢は、外的整合性のスキーマを保持することである。外的整合性のスキーマは、内的整合性のスキーマ（自己保存）の権力性を繰り延べることによってのみ機能する。己の権力性を放任すれば、真実から疎外される。しかし、こうして獲得された外的スキーマは、内的整合性を混乱させる。われわれの知は、この混乱に調和を与えて－身体化して－、はじめてその活動性を取り戻すことができる。外界を理解するとは、すなわち外界との調和を達成するとは、まさに権力性の繰り延べと、自己変容のプロセスである。

哲学者 Sara Ruddick は、*Maternal Thinking-Toward a Politics of Peace*⁰⁷⁾ (1989, Holding, pp77-78) の中で、Feminism の立場で次のように述べている。

毎日の要求に悩まされながらも、愛情のために自然の摂理と交渉をしながら、それでも比較的大きな諸問題には一瞥を加えながら、母親たちは、傷つきやすいものに対応するための基本的態度、性格学的な擁護性 characterological protectiveness を獲得している。それを私は「holding」と呼んでいる。Hold するとは、危険を最小化し、相違を鋭く強調するのではなく、むしろ調停することを意味する。Holding とは、最小限の調和を保とう、物質資源を維持しよう、そして子供たちを安全に守るために必要な技能を獲得しようとする眼差しで物事を見る方法である。それは「世界の防衛、世界の保持、世界の修復・・・争いの絶えない擦り切れた家庭生活を眼に見えない形で織り直すといった」仕事によって引き出される態度である⁰⁸⁾。詳細な吟味、謙遜、それに陽気さは、擁護する人たちの心に刻み込まれている。なぜなら、こうした良い性格が可能にする holding は、擁護する者にとっても擁護される者にとっても、（人間を含めた）自然の摂理が許容するのと同じぐらいに、遅しとかつ健全であるからである。

Holding、すなわち擁護性の基本的態度は、それを可能にするあの特質と同様に、墮落した形態に陥ることに対しては責任を持っている：墮落した形態とは、過度に親密に、過度に自信なさげに、過度に物質的に hold したり、ずり落ちつつある生活をその中に埋め込むための財産を収集したり蓄積したりすることである。Holding が、青少年を狂気に駆り立てる可能性もあるということには疑問の余地はない。また Holding によって特徴付けられた擁護性は、決して「冒険」といった理念ではない－母親のイメージがまったく伴わない概念ではない。したがって、母親自身は、子供たちがそれぞれに成長するための必要に応じて発揮される、自分たちの擁護性の傾向に、犠牲的なものを感じている可能性もある。

擁護的な母親たちは、しばしば、子供たちが依存している父親や、恋人や、祖父母や、教師との安定した関係を hold するといった仕事を自分に課している。このような holding や調和の形成は、それなりのリスクを伴っている。母親の中には、自分の子どもたちへの心配から不機嫌な医者や教師に対して不必要に慇懃になったり、自分たちの上司を喜ばしたり、自分たちを害するような結婚をしているものも

いる。さらに、保存的な愛の認知的才能と美德は一すなわち、詳細な吟味、陽気さ、謙遜—は、擁護的な **holding** そのものと同様に、身分の低い人に好都合であるばかりでなく、権力のない人々に受容られたり、おそらく、そうした人々の中でより高度に発展させられたりする。だから、彼らを讃美することは、抑圧そのものを礼賛するのと同じようにみえる可能性がある。しかし、他方において、これらと同じ能力が、政治的な闘争では彼らの誹謗者の懸念より効果的であることを、証明しているのである。

Ecological Ontology の立場から、擁護論を展開しても、**Ruddick** とまったく同じことを述べることはできないとしても、最小限の調和、詳細な吟味と謙遜、それに非権力性については、同等以上に強調することができる。最小限の調和を保持しようとする 것과、自己の権力性を繰り延べながら外界を取り込もうとすることは、まったく同じ事態の表裏の表現である。すなわち前者の「保持する」は **hold** によって、後者の「繰り延べる」は、**hold off** によって表されるのである。**Ruddick** は、**Feminist** として男性の権力性に過敏に反応しているが、**Ecological Ontology** の立場では、あらゆる存在の権力性を拒絶するのである。

2. 真実からの疎外—破綻の原理

権力的であることは、真実から疎外されるばかりではなく、誤って把握された当の存在を権力化するという意味でも、歓迎すべからざることである。しかしながら、権力については、生命の根源的欲求であるかの如きまことしやかな神話が流通している。しかし、権力は生命の根源的欲求などでは断じてない。生命の根源的欲求と言えるものは、むしろ自己の存在確認であり、それが困難な場合に発動されるのが、権力性なのである。自己の存在確認の欲求は、免れることはできない。その証拠が感情の動きにある。「状況と感情」の連続時系列を観測することにより、感情は常にこの欲求の周りを巡っていることを裏付けることができる。それに対して権力性は、その存在の受容によって回避することが可能である。

しかし権力性はあらゆる場面で発揮されてきている。たとえば、学校教育の「歴史」の授業でさえ、それはまさに「権力の歴史」であり、その内容は、その時代の民衆が何を考え、何を食べ、何に喜びを感じていたかなどという草の根の現象には、背を向けている。後に、科学史、技術史、美術史、建築史、音楽史、等々の歴史を学び直すことなしには、歴史の真実を垣間見ることすらできない。権力性は人間や社会の本質であるかのように洗脳することが、まさに体制的権力の思惑なのである。

政治とは、まさに人間の権力性を体制化したものである。そこには常に正義の見せかけだけがある。先進諸国の侵略性と、それに対抗するテロリズムとは、ともに醜い政治的権力性である。テロリズム撲滅などという政治的スローガンは、テロリズムと同等の権力的悪臭を放っている。

歴史上崩壊しなかった権力構造などはない。真実から何処までも疎外され続けるということとはできないということであろう。しかし、そうした権力性は、すべて民衆のそれでもある。民衆は政治社会的な権力性そのままに行動している。いずれ破綻するのは、体制的権力構造

ばかりではない。民衆の生活そのものも破綻せざるを得ないのである。その恐怖は、地球の砂漠化として目前に迫っている。

権力の宿命性という神話に、挑戦しなければ、われわれに明日はない。権力性を宿命と考えずに、権力性を発揮しないで済むような行動のあり方を、すなわち **holding** という行動原理を、システムとして世界に定着させねばならない。われわれは、次の章で、そうしたシステムの諸特徴を考察しようと思う。

III. Holding の原理が価値に及ぼす影響

1. 拮抗する価値に対する勧告

Holding の原理は、拮抗するいずれの価値に対しても、その存立を脅かさず、それぞれの批判を受容するような行動選択の可能性を熟考するように勧告する。それは、如何なる価値もそれぞれの存在を特徴づけ、それぞれの同一性の拠り所となってきたものであること、考え方・感じ方の多様性は、人間社会を豊かにし、発見に満ちたものにしてくれること等を考慮する時、当事者たちには、けっして致命的な影響を与え合わないような行動選択をしてもらわねばならないという理由によっている。

批判された価値は、当面、その歴史的・文化的な意義を再評価して、自己同一性を確認すればよい。しかしその次には、現実社会における、問題・課題を洗い出すという作業が遂行されねばならない。その中では、相手側からの批判に耳を傾けねばならない。しかし、もっと大事なことは、そうした批判を解消し、己の拠って立つ新たな **robust** な基盤を作り上げるということである。批判に対決するというより、批判されることによって、足腰を鍛えるということに軸足を移す必要がある。

確固たる価値基盤を有することは、実はそれほど尊敬されるべきことではない。それは単に、己の権力性に甘んじ、その侵害に対して抑鬱を来すばかりである。とはいえ、自己の拠って立つ場の存在することは、自己の確認には欠くべからざることである。したがって、有することは是である。しかし、それは尊重されることはあっても、尊敬される理由にはならない。尊敬されるべきは、批判に対して真摯に対応する姿勢である。こうした姿勢は、敵対関係を解消し、同一性を拡大する。それぞれの基盤がより普遍化することは、それぞれの存在確認を容易にする効果がある。Naess の提唱する「大自己実現」は、本来こうした過程を積上げたところになければならない。しかし、Naess の主張通り、これが直感や靈感によって到達されるとすれば、いかにして同一性を超え得ているか、甚だ疑問である。

こうした変容は、むしろ自発的なものでなければならないが、内的にも外的にも、それを促進する環境を作ることにはできる。そのためには、その同一性の評価と、その同一性が抱え込んでいる課題とを審らかにすることである。同一性の自発的変容は、基本的に同一性の保存と課題解決プログラムの **install** という形で実現されねばならない。もっともこの両者が

調和的であるためには、同一性を成立させてきた諸原理の一部をより普遍的なものに交換するような柔軟性が必要である。

2. 価値体系に起因する紛争の終焉

宗教・政治経済体制・民族・性差・階級……に起因する紛争は、有史以来已むことがなかった。それは、いつまで経っても、自己の同一性から、すなわち自己の同一性を保存しようとする権力性から、自己を解き放つという行為が成立しないということで、実に虚しくも思われる。権力性を回避する知恵を持たないレベルの、宗教・政治・国家……が、要するに、成長しないことが約束されたものが、あるいは大自己実現ができないものが、尊敬の対象になりうるはずはない。尊敬されるためには、**holding**の姿勢を、実践で謳い上げる必要がある。

とは言え、そういう尊敬の対象になり得ないものに対する同情は禁じえない。成長し得ないもの、新たな世界を見ることのできないものは、それ自身が気の毒である以上に、それらは、自己の権力性という刃を収める暇がなかったということ、すなわち、自己存在が脅かされ続けて来ているということが、気の毒である。だからこそ、いかなる存在といえども、その存在性を傷つけるべきではないということになる。

傷つけられた存在は、自己防衛のために権力化し、それが弱者への眼差しを曇らせる。たとえば、ここ 35 年来問題になっている **gender** に関わる闘争を見てみよう。男性性 / 女性性といったことは、確かに歴史的に作られたものであり、人間固有の特質ではない⁹⁹⁾。そしてまた、こうした問題が起こってくること自体も、歴史的なことである。つまり、女性が、男社会の中の何者かになろうとする時に抱え込む問題なのである。男社会は、政治経済的目的のために権力的に体制化されたものとして存在している。それは男が作ってきたものではあるが、必ずしも男性性を体制化したものではない。しかしそこではむしろ政治経済社会の論理が強迫的に機能しているに過ぎず、そのような社会に組み込まれることで、男も女も権力化するのである。多くの女性が、この社会に進出した時に、すでに権力化した男性に出会ったというだけの話であって、進出した女性たちも、今や十分権力的になっている。**Feminism** が捉えている「女性＝自然」という図式は、非常に被抑圧的なもので、「男性 / 女性＝自然」と表現されている。ここには被害者意識によって権力化した姿が歴然と見られる。確かに同情には値する。しかし尊敬には値しない。権力化した存在は、必ずや弱者への眼差しを欠くことになるからである。

最近、どの大学でも、セクシャル・ハラスメントから一部の「女性」たちを守るための委員会が作られ、判で押したような憲章まがいのものが掲げられている。ところが、皮肉なことに、人権委員会はまだ設けられていないといったことが多い。多くの学生が、大学経営のエゴによって、展望のない生活を強いられている。もし彼らが駆け込むとすれば、それは人権委員会であって、けっしてセクハラ委員会ではないであろう、より権力的なものから、優先的に保護されるとすれば、物言わぬ自然の保護が最後に回されるのは、権力宿命論の当然

の帰結ということになる。こうした、帰結を導かせないためには、セクハラ委員会の前に人権委員会が、人権委員会の前に、存在性の保護委員会が作られねばならなかったのである。

こうした主張が一笑に付される時代は、あるいは終わりつつあるのではないかと思わせる人物が現れてきた。それが *Ecofeminist Ariel Salleh* である。彼女は、「女性＝自然」の図式の中に、女性を、非同一性を根気強く同一化する者、holding を身体化する者、地球を救済する者として、女性の歴史的同一性をより創造的に把握し評価することで、再生産活動を担っている女性たちにエールを送っているのである。それが自分の義務であるとも述べている (*In Defense of Deep Ecology: An Ecofeminist Response to a Liberal Critique, Beneath the Surface*, 2000) ¹⁰⁾。また、これに先立つ *Ecofeminism as Politics: Nature, Marx and the Post-modern* (1997) の中では、生態学に対する最も強力な闘士はいつも、いわゆる解放された feminist とは対照的な、草の根の専業主婦たちであるとも述べている ¹¹⁾。自らの権力性を繰り延べることができてはじめて、物言わぬ者への眼差しが生まれてくるのである。男性は、漸く遅ればせながら、「人間(＝男性)＝自然」を目指すようになりつつあるものの、環境問題においては、そしておそらく人格的にも、草の根の専業主婦たちに大きくリードされているのである。

権力性をむき出しにした闘争の歴史は、まさにその権力性を繰り延べようとする精神性によって終止符が打たれねばならない。Salleh の言うように、政治・経済・倫理学は言うに及ばず、Deep Ecology さえも、Ecofeminism 哲学に参集することは、大きな示唆を受けることになる。それは Feminism の gender 固着性を打ち破るためにも有意義なのである。

IV. この原理が政治に及ぼす影響

1. 多数決原理に替わる新しい社会原理としての holding

いかなる価値もそれに依拠する存在がある以上、それを傷つけるべきではない。Holding の方法に拠って対処されねばならない。こうした主張に対して当然予想される反論は、それでは、この社会政治経済体制の中では事が決せられないというものであろう。しかしそれは体制神話というものである。無理をしてまで決すべきこととは何であろうか。なぜ無理をする必要があるのだろうか。無理をする位なら決せずにおくという腹の括り方以上に、それが優れている理由とは何であろうか。不毛な反駁、不毛な闘争を覚悟する必要がどこにあるのか。お互いに最低限の調和を図ろうとして、時間をかけることが、結局、早くかつ本質的な解決に至れるのではないか。

しかし、こうした問題提起は、権力によって呆れ顔で葬られる。たとえば、国家という同一性が脅かされる時に、それを防衛しようとする権力性は、まったく議論の余地がないほど自然なものであると言い放たれる。しかしながら、果たして国家という同一性を必要としているのは、誰なのかと問うてみれば、そうした論理の欺瞞性は明らかであろう。国家という

同一性を死守するなどという欲求は、隣国民とほとんど変ることのない草の根の民衆にとっては、まったく異質なものであるからだ。

ある体制の中では、すなわち、ある利害関係の中では、意志の自由というものを期待することはほとんどできない。したがって、そのような状況下での多数決というのは、利害関係の勢力関係を反映するだけのものである。それを最大多数の最大幸福などと言って合理化してきたのは、まさに勝つことが体制的に保証された政党／階層であって、まさに権力的な陰謀である。多くの国民各自の同一性を傷つけるという倫理的痛みを省みない体制の中で、子どもたちの倫理感覚は死滅していくのである。

多様な価値が尊重されることなしに、自発的な変容は不可能である。またそうした状況では権力的な自己防衛の姿勢ばかりが蔓延し、原理的に、国民的・国際的融和は達成されない。それに対し、自発的な変容の環境を醸成することは、多少時間を要するが、国民的・国際的融和においては不可欠な課題である。

2. 新しい政治の機能

政治家には、国家・国民を指導するといった、時に思いあがった心性が見受けられる。われわれが、土壌と天候の論理に従った草の根として生きようとする時、彼らの政策など、邪魔でこそあれ、役に立つものはない。われわれに本当に必要なものは、権力性を繰り延べせずには得られない真実と、その真実に根差した当為と、当為を実行する力量である。われわれは、草の根として、そのダイナミックスに従って生きていくだけである。真実からの疎外を運命的に背負い込んだ権力的で理不尽な行為は、完全に異質なもので、まったく浮き上がったものである。

したがって、新しい時代の政治は、国の舵取りといった性格のものではあり得ない。それは何者をも傷つけまいとするひたすら調停の作業である。必要なのは、政治家ではない。**Holding** を弁えた、**Ecofeminist** である。そうした人々は、異なる価値集団に割って入って、双方の批判の受容と自発的な変容を試みさせるであろう。何か特別のことは一切する必要はない。必要なことは、ひたすら、あらゆる存在の価値を守り続け、調和を取り結ぶことである。

国際機関にこうした調停官が存在すれば、神話的な国民的同一性を守るための国境は不要である。なぜなら、あらゆる同一性が守られ、その拡大が図られるとすれば、各国が、各自の同一性を守る必要はないからである。今日的課題からすれば、国境の代わりに、むしろ生命領域的な同一性を確保するための区画を、生態系に即して、多重的に 設定し保護することが、政治の大きな役割となっていく。国家というものが解体され、生命領域の管理単位として生まれ変わるということは、人間的なあらゆる同一性と生態系との調停という課題が、政治の主たる **agenda** になるという意味である。そこは、生産と消費のあり方が、すなわち人間の生態系の変容すべき姿が、自然の生態系との調和のために模索される場となる。

これまで、**Deep Ecology** は、権力に対する無防備性を、社会・政治学者たちに批判され

続けてきた。正当な権力なしに不当な権力を抑えられないと。しかし、憲章と調停の手順書以外に必要なものとすれば、それは、まことしやかな「権力の論理」に与しないことである。あらゆる権力を拒否し、あらゆる同一性を擁護し、その拡大（大自己実現）を図ることこそ反面的「歴史」の教訓である。

V. Deep Ecology がしばしば社会政治的側面から批判される理由

1. Bioregional deep ecology に対する社会政治学的批判の虚偽と真実

権力性の発生は避けがたく、その対抗手段としての権力は欠くべからざるものであるといった権力宿命論はどこまで真理でどこまで虚偽であろうか。

社会学者には、人間を強迫的に権力的な社会と結び付けようとする傾向がある。人間はそれぞれに関係場を構築しつつその中に棲み込んでいる存在であることに異論はない。しかし、そのような関係場としての社会は、彼らが思い描いているような権力構造を宿命的に持っているものではない。権力性は自己防衛として発現されるものであって、その関係場が良好なものであれば、現れることはない。疎外された存在を丹念に救済していくという精神性が、すなわち **holding** の精神性がそれを可能にするのであれば、彼らの宿命論は、余りにも的外れではなかろうか。

彼らが権力性というものを宿命的に考えているのは、彼らの言う「社会」というものが、これまでの人間の不幸な歴史の中で生み出されて来たそれであって、権力性の発生を統御できなかった時代の未熟なそれであるからなのだ。われわれはなぜ、そうした未熟な社会の特性を、不可避であるかのように背負わせられねばならないのであろうか。

人間はかつてさまざまな病気を不治の病として恐れてきた。「不治の病」というレッテルを張付けることで、ますますその恐怖を募らせ、病そのもの以上の精神的苦しみを生み出してきた。しかしながら、病そのものが克服されるに従って、そうした疎外の社会的要因が洗い出され、反省が迫られることになる。まったく同様に、権力性の宿命性を頑迷に言いふらす社会学者には、いずれ厳しい歴史的評価が下されるであろう。

もっとも、もっと性質の悪いことには、そうした後世の評価ではなく、この現世の利益を得ようとする居直りの姿勢が、すなわち権力への迎合が、アカデミズム全般を覆っている。しかし問題はアカデミズムの墮落などという小さなことではない。そうしたアカデミズムの性格が、社会の変革を遅らせ、多くの疎外を放置する原因になっているということなのだ。

ところで、たとえ社会学的批判が過っているとしても、Deep Ecology への社会学的批判は、真実かもしれない。なぜなら、Deep Ecology の精神性の核をなす、「自然との同一性を拡大して、大自己実現を図れ」という命題の中には、確かに社会的レベルで権力性を回避するための方策がまったく見当たらないからである。大自己実現を達成すべく、自然との同一性を推し進めるためには、生態学的存在論の立場からすれば、**holding** の精神性を身体化す

る必要があったはずである、その身体化が為されれば、次にその精神性を新しい社会原理として、包括哲学へ脱皮していくという努力が可能であったはずである。

ところが、そうした努力は為されてはこなかった。それを決定づけたものが、Naess の「大自己実現を！」で始まる、彼の *ecosophy*¹²⁾ であった。Naess 自身は、それを Spinoza の靈感によって、またおそらく多くの Deep Ecologist たちも、このプロセスをさまざまな宗教的靈感や直感によって通過するのが正しいと信じていたのである。しかしこの方法では、同一性の超越は保証されない。それゆえ、キリスト教から東洋的宗教に乗り換えて、それを克服しようなどという議論になってしまう。また、後述するように、よしんば、そうした方法で同一性の超越がなったとしても、その結果を、間主観的な了解にもたらしることができないのである。

本来 Ecosophy の第一原理とすべきは、「存在性の立ち上げ」ということであり、この原理が要請する「holding の精神性」を新しい社会哲学の原理とすべきだったのである。

2. Holding の原理が要請する環境哲学の性格

要請される哲学は、holding の原理を要請した「存在性を立ち上げよ」という命題の直系の子孫として、それは決定的に存在論的である。そこでは、存在性というものは、その存在が構築しつつ棲み込んでいる関係場の姿を克明に記述することによって捉えられると考えられている。この哲学の考察対象は、まさに万物に及ぶのであって、Deep Ecology がもつぱら自然界への同一性を説くのと一線を画して、この哲学は、人間社会を含むあらゆる存在の、存在性の把握から、その存在自体の wellbeing を模索し、その疎外性を取り除くべく、関係場の改良を考究する。

この哲学は、存在の多様性を尊重し、己の権力性を克服して同一性の拡大を図ろうとする姿勢に、尊敬の眼差しを向けている。関係場を共に構成している他の諸存在が、互いに響きあう協調関係を多面的に発揮するような、より robust な系を構成するためには、個々の存在の固有の姿だけを価値とするのではなく、自発的に変容するその柔軟性が尊ばれる必要がある。こうした眼差しこそ、holding という精神性の特徴である。

したがって、固有の価値を尊重するが、固有の価値だけを考慮しようとする精神性には、再考を求めることになる。この哲学は、また、自発的変容の柔軟性が、いかに抑圧されうるかを考究の対象にせねばならない。ただし、これは、自発的変容が、いかにしたら促進されるかという設問とは微妙に差があることに注意する必要がある。前者は、自発的変容が柔軟に発揮される自然な状況を探求しようとしているのに対し、後者には、それを人為的に利用しようとする意図が含まれている。

確かに、自然の原理とは普遍的なものであるから、実に不自然な状況下で、すなわち自然が選び取ってこなかったような状況下で、それを発現させることができる。核分裂や核融合の原理は自然のそれではあるが、地球の自然は核の連鎖反応の臨界状態を作り出しては来な

かった。核兵器を爆発させることは、まさに人為的な装置によってその原理を発現させることである。そうした人為的現象は、人間の病的な権力性によって惹き起こされるものであって、けっして地球の生態系に配慮したようなものではない。技術の有するこうした権力的操作性に対して、**holding** の原理は常に懐疑的な眼差しを向けている。したがって、その原理は、科学と技術との安易な融合を許さない。

これは工学的技術に関してばかりではない。たとえば、心理学的な知見の応用という側面においても、それが疎外された対象の治療ではなく、生産効率を上げるための権力的操作であるような場合には、そうした応用は、生命を物象化するものとして、また精妙な関係場の調和を損なう可能性のあるものとして、厳しく批判される。

Holding の原理は、調和を繋いで、全体的な調和に向かおうとする精神性ではあるけれども、強迫的な全体主義の立場とはまったく異なっている。なぜなら、各存在が、草の根のレベルで、**holding** の **dynamics** に従うことによって達成される調和というものは、「おのづからなるもの」であって、権力の恣意に委ねられるべきものではないからである。調和の達成のために実現される具体的な「自発的変容」の姿を、あらかじめ予測することは、原理的に不可能である。ところが、現実には、目標の人為的設定が冒険的に為され、それらの目標の全体的な調和性の保証もないまま、自発的変容を事実上抑制して、個性の変質を強要し、底知れぬ疎外をもたらしているのである。

こうした歴史・世界認識に基づいて、**Holding** の原理を要請する環境哲学では、各存在の柔軟な自発的変容を実現するための自然な状況を作りながら、全体的な調和に向けて、じっくり事態を展開させて行こうとすることが、最も存在性に配慮したやり方であって、実際に、母なる地球は、悠久の時間をかけて、こうした事態を展開させてきたと考えているのである。

ところで、存在の柔軟な自発的変容を実現するための自然な状況とは、人間存在に限って言えば、その存在の存在性が受容され、その権力性を発現する必要性のない状況である。こうした状況では、自己防衛のために浪費しがちな精神エネルギーを、外界との調和のための自己変容に意欲的に投入できるようになることがよく知られている。

3. 生態学的存在論を基盤とする環境論

科学的生態学は、存在と環境との精妙な相互依存関係の事実を通して、存在のあり方は、それが属す生態系と切り離せないものであるという知見をもたらした。こうした知見は、ものの自体の本質を論じようとする存在論に衝撃的な影響を与え、全体論的な生態学的存在論の立場を生み出した。

存在の在り様と、存在間の諸関係場の在り様とは、不可分な関連の中にあるという生態学的存在論の考えは、たとえば、自己が構築しつつ棲み込んでいる関係場の性格のうちに、自己を見出すという心理学的な経験においても、データベースの諸項目間の全面的な関係分析の中に、事態性が立ち上がるといった情報处理的な経験においても、人それぞれの経験領域

で、十分確認することができ、また応用することもできる。

こうした生態学的存在論は、それが科学的生態学の直系の子孫であることによって、自然と人間との関係を考える基盤を提供するわけであるが、それに留まらず、社会と人間との関係を考える基盤をも提供しうるのである。その意味で、生態学的存在論は、本来的に、Deep Ecology を包括哲学（社会・政治哲学をも生成するような真の環境哲学）に変容する力を持っているはずである。

この意味で「存在性を立ち上げよ」（註）と言う筆者の Ecosophy の第一原理は¹³⁾、生態学的存在論に立ち帰って、holding の原理に沿ったその草の根的な実践を行えという意味である。そこには必ず環境と密接不可分の存在の喜びと悲しみがああり、同じ時空に居合わせた存在同士の共感といったわりと、そして当為とがある。そうした経験の積み上げが、おのずからなる環境論を生み出していくのである。もっとも、その過程には多様な環境論が存在しうるのであり、必ず相互批判が惹き起こされるが、そうした過程においても、holding の原理が、その統合を駆動するのではなければならない。

註. 存在性の立ち上げと権力性のくり延べ

存在は、それが構築しつつ棲み込んでいる関係場の中で、その姿を作り出している。したがって、われわれが、ある存在のその存在の在り様（すなわち存在性）を見ようとするならば、それが周囲に作り出している多重的な関係場の姿を、具にそして丹念に観測し記述すればよい。その姿によって、その存在の有する特性を様々に見て取ることができる。

こうした過程において、最も重要な知の戦略は、外界の独立性（非同一性）ということを経に据えるということである。われわれの知は、必ずや、内的な整合性（同一性）に拘わっているからである。非同一な存在に向けられる自己の権力性を、繰り延べすることなしに、すなわち、holding の原理なしに、外的に整合な姿で、それを把握することはできない。

4. いかなる価値観も否定しない行動選択の原理

拮抗しあう価値同士の紛争を、本質的に解決するには、それぞれの立場に、その同一性の自発的変容を地道に（すなわち自然な環境を作り出すことで）働きかける以外にはない。それに対し、敵対する価値に対して、取り返しのつかない行動選択をして、そのしこりを引き摺ってきたのが、これまでの権力的な歴史であった。しかし、上述したように、権力性を宿命として受容れることは、不治の病という神話的レッテルを貼ることで、病以上の二次的災害をもたらすことと変らない。われわれは、こうした権力的な歴史観から決別せねばならないのである。

権力性は、けっして生命の根源的な欲求などではない。生命の根源的な欲求という名にふさわしいのは、むしろ自己の存在確認（あるいは同一性）ということであって、それが困難な場合に、自己防衛の姿として権力性が発揮されるのである。自己の同一性が受容され、強化される時には、けっして権力性は現れない。したがって、敵対する価値に対して、それが敵

対者の同一性の一部であることを、わが身に引き寄せて理解し、己の権力性を収めることが、まず以て為されるべきことである。

その次に為されるべきは、相手側から批判される側面についての、体系的検討、すなわちその体系を構成する諸原理の中に、その問題点を探り出すことである。問題となる原理が特定されるならば、次に為されるべきことは、本当にそれが不可欠な原理なのか、もっと包括的な原理で置き換えて、同一性を保ちながら、相手の批判に応えられるような自発的変容の可能性はないのかという模索である。

こうした作業も、自己の同一性を絶対化する権力性との闘いである。しかし、諸原理に基づいて構成された整理された体系であればこそ、作業はそれだけ容易になる。Naess が各自の Ecosophy の構築を推奨しているが、これは権力的闘争から解放されるために、大いに意義がある。権力性を発揮させることのない行動選択のあり方を、標準化し、国際的な憲章にできれば、平和に資するであろうことは疑いがない。

5. Deep Ecology 批判と弁護が取り逃がしているもの

Deep Ecology 批判の中には、それが持つ原理主義的な傾向とか、二項対立的な過度に単純化された把握傾向を指摘するものがある。そうした傾向は、多くの他の環境運動にも伴っているように思われるが、そうした一種の権力的な性格は、かけがいのないものが破壊されつつある脅迫的現実によって惹き起こされている可能性は否定できない。しかしながら、Deep Ecology が批判されるのには、別の特殊な事情があるように思われる。

結論から言えば、それは、Deep Ecology においては、生態学的存在論の原理的姿勢が明確に打ち出されていないことによるのである。もし生態学的存在論の立場に則って、「存在性を立ち上げよ！」ということから出発するならば、そこには常に観測の詳細なデータと推論過程と判定結果とが残されるのであって、他者への了解性を確保する可能性が開かれることになるのであるが、「大自己実現を！」から出発する Deep Ecologist たちは、そのプロセスを、彼らの多神論的傾向に見られるように、暗黙的な宗教的靈感によっているのである。たとえある事態の正しい判定結果を獲得しても、それを他者に了解させる方法を欠いている。そうした同一性が抱え込むことになる苛立ち、彼らを権力化するであろう。単純化され過ぎた原理主義的傾向は、ものごとを丹念に観測し記述するという精神性の欠如であるとともに、そうした苛立ちの現れでもある。

このように Deep Ecology は、その正しい方向性にも拘らず、多くの綻びを抱え込んでいく。これはきわめて残念なことである。しかもさらに残念なことには、選集 *Beneath the Surface* における多くの批判論文は、Deep Ecology の批判されるべきところを、正しく指摘しているものの、その過ちの本質的原因を取り逃がしているのである。

唯一例外であったのは、Ariel Salleh, *In Defense of Deep Ecology: An Ecofeminist Response to a Liberal Critique* であったが、これは、同紀要 45 号 (2004.3) で紹介したように、

Deep Ecology を、Ecofeminism 哲学へと誘うものであった。そして、その Salleh 哲学の核心には、この小論の中心テーマである Sara Ruddick の holding の原理が、すなわち生態学的存在論が要請する知の戦略的スキーマが控えていたのである。

VI. おわりに

従来、価値は行動選択の倫理的基準であると見なされてきた。しかし、それは真実を同定して憚らないという傲慢な過ちを冒している。真実がどのようなものであるかは、永遠に推測されるべきものである。われわれにあるのは当面の解釈だけである。解釈とは極めて権力的な行為である。このことを弁えて、どこまでも外的整合な解釈の向こうに、真実を観ようとするのが大切である。

物理学の諸原理ですら、永遠に変容されながら、統一されていくものである。倫理学が行動選択の原理でありうるためには、それは数学のような純粋原理の体系であることは許されない。むしろ物理学的な経験の体系でなければならない。

しかるに、ある倫理学者は、「幸福とは、おそらく、『おもうさまなること』に近い概念だ」という趣旨の発言をしている¹⁴⁾。しかし、実際に人の心理を探っていくと、「幸福とは、自己の存在確認ができることだ」ということが、「状況と感情」に関するあらゆるデータから推測できる(註)。確かに「おもうさまなること」は「自己の存在確認」を可能にすることもあるが、その権力性ゆえに、自己の破綻を招くことにもなりかねない。それは決して幸福ではない。

註. 幸福の条件について

幸福とは、当面、自己の存在確認ができることである。自己の存在確認とは、自己が構築しつつ棲み込んでいる自他の関係場の中に wellbeing な自己を見出すことである。幸福の確からしさは、その関係場の確からしさに依存するから、幸福の条件とは、棲み込んでいる自他の関係場を確かなものとして構築することである。Hegel は、それについて神との合一であると言っているほどである¹⁵⁾ (ヘーゲル全集、宗教哲学、中巻、仏教、ユダヤ教、ローマの宗教)。そこには、確かな関係とはどのようなものか、そのような関係において自己が wellbeing であるために、いかに自己を変容させるべきか、さらに、自発的自己変容といった問題を自己の課題になしうるための知的な発達条件を、この社会は子供たちに保証しているのかといった問題が存在している。

ある権力集団は、「権力は人間の根源的な欲求である」という言葉に酔いしれた。しかし、それも間違っていた。「自己の存在確認こそ、人間の根源的な欲求である」からである。自己の存在確認ができない時に、自己防衛として発揮されるのが権力性であって、それは根源的な欲求が満たされない時の、代替欲求に過ぎないのである。自己の権力性が根源的な欲求であると思い込んでいる人間は、己の存在確認ができないでいる疎外された存在である。

権力性は他者を傷つけ、他者を権力的にする。権力の歴史は、まさにこの連鎖で満たされていた。そして今は、人間の権力性が自然を傷つけ、それによって人間ばかりではなく人間以外のあらゆる存在が、自然から疎外され、病んでいるのである。権力的であることは、その人間を、真実から疎外し、破綻させる。子どもたちの安らかな将来を念ずる者は、権力性を繰り延べる努力から免れることはできない。

権力性を繰り延べよという教示は、Ecofeminist に拠っている。育児や介護等を成立させるための不可欠な姿勢として定式化されたものであるが、生態学的存在論の立場からいえば、この姿勢こそ物言わぬ真実を掴み取るための必須の姿勢であり、この姿勢を失うことが、真実から疎外される最大の原因なのである。これを帝国主義者や多国籍企業に対して、またテロリストに対しても、突きつけて行かねばならない。

しかしながら、こうした精神性が普及しつつあるのかと問われれば、憂鬱のひと言に尽きる。漂流するフリーター（NHK 2005/02/05）、仕事を優先する女性の増大（内閣府調査 2005/02/05）といった現象の背後にあるものが、彼らの知の空疎、自己確認への絶望的なあがき、権力性をむきだしにした自己防衛であるとすれば、その命運は痛ましい限りである。

体制的権力が、そうした存在の産生を意図していたわけではなかったのとまったく同様に、彼らは意図せぬ疎外を産生していく。体制的権力が自ら生み出した疎外のために破綻していくのとまったく同様に、彼らもまた破綻する運命にある。こうした状況を救うのは、権力宿命論ではありえない。われわれは「権力性の繰り延べ」すなわち holding に基づいた社会システムの構築を真剣に考えねばならないのである。

注

01) George Sessions, *Deep Ecology for the 21st Century*, SHAMBHALA, 1995.

02) *ibid.*, pp265-268.

PART FOUR DEEP ECOLOGY AND ECOFEMINISM, SOCIAL ECOLOGY, THE GREENS, AND THE NEW AGE, INTRODUCTION からの抜粋

...

1980年代の半ばになると、Murray Bookchin やその他の社会生態学者たちによって、またいろいろな Ecofeminist の理論家たちによって、深相生態学運動（や個人的な生態学的活動家たちの言説）に議論攻撃が向けられた。科学的生態学は、深相生態学の遠近法を鼓舞してきたが、Bookchin は次のように主張している。科学的生態学は、人間や人間社会に、ほとんど妥当しないと。（もっとも、それは、おおむね彼の「第二の自然」観の擁護のように見えるが）。他方で、同時に、彼は「ecology」という言葉（およびその積極的な含意）を、社会生態学者としての彼の立場を参照するために割り当てていた。彼らの人間中心的な「第二の自然」観を受け容れれば、なぜ、Bookchin や他の社会生態学者たちが、人間中心主義に由来するものとしての環境危機の分析と共に、深相生態学綱領の環境中心主義を拒否す

るかということが理解できる。社会生態学者たちは、主として人間社会の正義の問題に関心を持つ傾向がある：彼らは、生態学的問題を、本質的に政治的で、資本主義や社会階層と社会階級支配の問題（「左派－緑化」的立場と言われてきたもの）に由来するものとして理解している。

Ecofeminist の立場には色々なものがあるようだが、それらはすべて、女性と自然の上に君臨する長年の西欧文化の家父長的姿勢に代わるものを目指して、人間中心主義的な立場からの環境危機の根源的な分析を拒否しているように見える。Ecofeminist の理論家の中には「第二の自然」観を信じているかのように書いている者もいるが、そうでないものもいる。いずれにしても、環境危機の根源的原因是、社会生態学者や Ecofeminist たちには、本質的に社会的正義と性差とが相互的に結びついたものと理解されている。すなわち、彼らはともに、環境危機を、種間の関係というより、種内の関係の結果であると見ているのである。

...

「深相生態学と Ecofeminism の語論とその平行性」の中で、Warwick Fox は、Ecofeminism と社会生態学によって深相生態学に惹き起こされる課題を吟味している。Fox は指摘する。深相生態学の環境中心主義は論理的にそして必然的にすべての存在に対する平等主義を帰結する；かくしてそれはその理論的な枠組みの下に、様々な社会運動の、feminism や社会正義といった、平等主義的関心を包含している。

Ecofeminist たちは一般に深相生態学の環境中心主義に同意している；彼らの批判は深相生態学の人間中心主義に根ざしたものとして環境危機を捉える分析に向けられている。しかし、Fox は、われわれは、その根源的原因として、たとえば、むしろ、種とか、西欧化とか、あるいは社会階層とかにはなく、何故、男性中心主義といったものに焦点を当てるべきなのかと問うている。なぜならば、社会的かつ人種的に、かつまた性差においても平等性を実現してはいるけれども、依然として生態学的に搾取的であるような社会を想定することができるからである。これは、Bookchin の社会階層分析についてもよく当てはまる。環境危機の根源的原因として、男性中心主義であれ、社会的階層であれ、いずれにせよそういうものを単独で選び出すことは、単純化しすぎた社会政治的な分析をもたらすと Fox は論じている。Ecofeminist も社会生態学者とともに、実践においてもまた、人間中心主義に留まる傾向があるという彼の主張は、まさに重要であるように思われる：実際、彼らは各自の人間的な社会政治的議題に焦点を当て続けていて、環境危機そのものを改善するに必要とされる政治的戦略や活力といった問題については、彼らには低い優先性しかないか、まったく無視されているのである。

Fox はまた論じている。いかに Ecofeminist や社会生態学者、それに他の批評家たちは、深相生態学の一般に人間が環境危機の原因であるという人間中心主義批判を、しばしばこの観点を人間嫌いと同様に誤って解釈している、...

03) Eric Katz, Andrew Light, David Rothenberg, *Beneath the Surface*, The MIT Press, 2000.

Introduction: Deep Ecology as Philosophy からの抜粋

...

深相生態学の基本原理や動機や正当化を考察することは、本質的に、深相生態学の *philosophy* を吟味することである。この課題にそった広範で多様な論文を共に持ち寄ることがこの本の目的である。これらの論文は、深相生態学運動の環境政策における議論や問題ではなく、深相生態学の哲学的議論や問題を吟味している。むしろ、哲学と政策との間の区別は、特に “applied” あるいは “practical” philosophy と呼ばれる領域では、いく分かは任意である。それでも、われわれは、この本に適した論文を選択する際に、その間の区別を維持しようと試みた。そして、実際の環境政策の状況（たとえば、生態的回復、生命多様性の維持、環境的差別といったこと）における深相生態学原理の実際の分枝に焦点を当てるよりも、価値の特性、存在論と倫理学の関係、それにいわゆる深相生態学的世界観の一貫性や無矛盾性といった、深相生態学の意味において本質的に哲学的な諸問題を考察している論文を選んだのである。

...

われわれのここでの目的は限られている。われわれは、こうした論集が、深相生態論哲学を批判的に吟味する多くの研究のまさに最初のものであることを希望している。...

04) Bron Taylor, *Deep Ecology and Its Social Philosophy: A Critique, Beneath the Surface*, 2000, pp269-299

...

確かに、国際化やそれがもたらす破壊的慣性に対する市民社会の抵抗は、尊敬に値する重要なことであり、広範な持続可能性戦略の一部ですらある。しかし、国際的で、強制力のある、地球規模の環境統治がなければ、そこには国際化や企業資本主義に対するいかなる勝利もないし、いかなる意味でも持続可能性への有意義な進展はない。実際、権力への新たな規制がなければ、国内的にも国際的にも、あの最も美しい生命領域的実験もモデルも、圧倒され、効果のないものになってしまうであろう。...

05) 丸山博道, *Ecosophy* の第一原理と道徳性, 名古屋経営短大 紀要第 45 号, 2004, pp59-81. IV. Ariel Salleh の Ecofeminist としての姿勢, pp63-78.

06) 知の戦略的スキーマ関連論文

1. 丸山博道, 認知科学の新しい動向と課題, 名古屋商科短大 紀要 第 34 号, 1994, pp127-149.
2. 丸山博道, 知の戦略的スキーマ, 名古屋商科短大 年報 第 6 号, 1994, pp127-137.
3. 丸山博道, 「方法序説」における知の戦略的スキーマについて, 名古屋商科短大 紀要第 35 号, 1995, pp111-138.
4. 丸山博道, 知の戦略的スキーマから見た「空疎な自己」について, 名古屋商科短大 年報 第 7 号, 1995, pp185-198.
5. 丸山博道, 知の戦略的スキーマから見たカント批判哲学, 名古屋商科短大 紀要 第 36 号, 1996, pp53-76.

6. 丸山博道, 知性の開拓について, 名古屋商科短大 年報 第8号, 1996, pp143-161.
7. 丸山博道, 自己の存在確認と知的スキーマとの包括的関連, 名古屋商科短大 年報 第9号, 1997, pp77-95.
8. 丸山博道, 知の戦略を相互了解性に関いて行く問題について, 名古屋商科短大 紀要 38号, 1998, pp199-217.
9. 丸山博道, 知的スキーマの包括理論から見た幸福について, 名古屋商科短大 年報 第10号, 1998. pp109-115.

07) *Sara Ruddick, Maternal Thinking-Toward a Politics of Peace*, Beacon Press Boston, 1989.

08) *ibid.* PART II, PROTECTION, NURTURANCE, AND TRAINING, 3 Preservative Love, Holding, pp78-79. 下線部分が, 以下の論文 10) の引用部分.

09) 小玉亮子, マスキュリニティ／男性性の歴史, 現代のエスプリ, 446, 至文堂, 2004/09.

10) Ariel Salleh, In Defense of Deep Ecology: An Ecofeminist Response to a Liberal Critique, *Beneath the Surface*, pp107-124.

11) *ibid.* An Embodied Materialism, pp114-115. の冒頭部分.

私の著作 *Ecofeminism as Politics: Nature, Marx and the Post-modern* の中で議論したように, 生態学に対する最も強力な闘士¹¹はいつも, いわゆる解放された女性権者とは対照的な, 草の根の専業主婦たちである. 第3世界においては, 生業農民や先住の狩猟-採集民たちが, 彼らの共同体の中で獲得した明瞭で物に根ざした確信を抱いて, 環境政治の中に入ってきている. こうしたどの集団も, 宗主国の中産階級の人間を利するように初めから作られた広域経済システムによってもたらされた搾取や受難の経験によって研ぎ澄まされた繊細な道徳感覚を持っているのである.

...

12) *Arne Naess, Ecology, community and lifestyle-outline of an ecosophy*, Cambridge univ. press. 大自己実現については, 1 Introduction, 7 Ecosophy T: unity and diversity 等を参照.

13) 05), II. Ecosophy の第一原理に置かれるべきもの-存在性の立ち上げ, pp61-62.

14) 吉川弘之 編, 東京大学公開講座 現代幸福論, 東京大学出版会, 1997. 06), 9. IV. 2. 「現代幸福論」批判 (1) 参照.

15) ヘーゲル全集, 宗教哲学 中巻, 仏教 168, ユダヤ教 303, ローマの宗教 418-419, 427.